



○ 夏期特別展「大山の信仰と歴史」

期間：昭和62年7月21日～8月30日（月曜日・7月31日は休館）

会場、平塚市博物館 特別展示室

内容：「大山寺縁起」・「大山錦絵」など、大山信仰の歴史に関する資料を紹介します。

○ 特別展講演会「大山の信仰と歴史」

日時：8月9日（日）午後2時から

会場：博物館講堂

講師：田中宣一氏（成城大学助教授）

○ 大山見学会

日時：8月12日（水）午前10時～午後3時

内容：大山門前町、大山寺、阿夫利神社下社などを見学します。

講師：内海弁次氏（大山寺信徒総代）

定員：30名

申込み：7月31日迄に往復葉書で。

## 夏期特別展「大山の信仰と歴史」

相模平野から秀麗な姿として望むことのできる大山は、私たちにとってもっともなじみ深い山の一つといえます。日々仰ぎ見る大山は、平塚市歌ばかりでなく、市内の小中学校などの校歌にも取り上げられ、その名を知らない人はないといえましょう。

今回の特別展では、このように身近に感じている大山の信仰や歴史について、その一端を紹介しました。大山信仰の歴史は古く、すでに平安時代には宗教的な組織が整えられ、さまざまな活動が行われていたと考えられます。10世紀初めに成立した『延喜式』神名帳には「阿夫利神社」が相模国13社の1社としてあげられています。

鎌倉幕府の記録として知られている『吾妻鏡』には、大山寺のことがしばしば見えていて、また、大山の山頂からは小型の泥仏や銅製五重塔などが出土し、山頂で何らかの宗教的な活動が行われたのは確実です。

大山信仰の歴史をみていくと、江戸時代初期までは時の為政者と密接な関係をもち、信仰をうけるとともに庇護されていたのがわかります。『吾妻鏡』の記載はそのことをよく示しています。今回の展示資料の中には、徳川家光が寄進した釣灯籠と梵鐘の一部がありますが、これらも江戸幕府の信仰と庇護を示すものです。

江戸時代初期までの資料は、ほとんどが大山と為政者との関係を示す資料です。庶民信仰の姿を

大山図



うかがわせる資料は、江戸時代中期から多くなっています。大山は江戸時代末に編さんされた『新編相模國風土記稿』には、「（石尊社の）例祭6月27日より7月17日迄、20日の間なり、其間諸国より参詣の者甚多し、此山頂は常に山外の人、登る事を禁ずれど、祭礼中は許して社前に至らしむ（祭礼中も女人は禁ぜり）」とあり、多くの参拝者があったのがわかります。

ここで注目されるのは、今と違って普段は山頂までの登拝は許されてなかったということです。阿夫利神社下社から山頂に登る本坂の入口には現在も木戸が設けられています。かつては普段は、

この木戸が閉じられ、祭礼になると江戸のお花講の人たちの手に依って木戸が開けられることになっていました。お花講は、現在は奉幣講という名称に変わっていますが、その伝統は受け継がれています。展示資料の中の奉幣講弁当箱は、この講中が使うもので、箱には元禄の年号が見えます。

庶民の大山登拝は大山講という組織で行われるのが一般的です。この大山講の広がりを阿夫利神社の『開導記』によってみていくと、明治時代の初めには関東甲信越、さらに静岡、福島県までに

もひろがっています。大山講の結成については十分明かではありませんが、これを積極的に押し進めたのは先導師だといわれています。先導師というのは、江戸時代までは御師と呼ばれ、各地をまわって信者を獲得したわけです。

今回の特別展では、館蔵の「大山寺縁起」を展示しました。この資料は現存する「大山寺縁起」のなかで、記年のあるものとしてはもっとも古く、一般に公開されるのは初めてです。（小川）



内海弁次氏と共に歩く、見る、聞く

# 大山見学会

特別展 "大山の信仰と歴史"  
関連行事として開催される

8月12日(水)大山ケーブル駅に集合。10時出発して茶湯寺にゆき八意思兼神社に寄り、ここから女坂を通って宝珠山来迎院、そして大山寺に詣ってお昼。午後阿夫利神社に至る全5時間の行程。講師に大山寺信徒総代の内海弁次氏をお願いした。集まった方々は平塚はもとより遠くは横浜、藤沢、秦野、隣りの大磯と地元大山までの21名。お顔なじみの方もいらっしゃるし、先の講演会にお越しの方もいらして賑やかに出発した。以下はその隨行記である。

玉垣で結界された参道のおれんじ色の敷石をふむと、そこに大山こまの敷石がはめこまれている。石段の数をしるしたものだそうだ。10分程で茶湯寺に着く。参道を左に折れた小橋の奥、六体のお地蔵さまに迎えられて本堂に上ると、須弥壇にお釈迦様が横になっていらした。寝ていらっしゃるので寝釈迦様一涅槃佛である。この形の仏像はあと京にご一体のみと聞く。丈短かく大きなおみ足が行儀よく重ねられているのが何とも愛らしい。お人が亡くなつて101日目にお詣りするのだそうだ。101日目はこの世と靈界との境い目に当る日なので、お寺に詣って一服いただき帰つて仏に捧げるのだという。今度は参道を右に入り八意思兼神社に向う。思い兼ねの兼が大工指物師の使うさしがねに似ているとあって、その筋のお参りが多いそうだ。ここで内海氏から「これより上のお堂を建てた木材は、どうやって運んだか」と出題された。車に積んで背にしょって、この先は曳いて運んだ。その道を曳地道といつた。

かつてはこの先女人禁制が、今は女坂男坂にわかれ。右は胸突く石段々の男坂、左は木陰やさしい女坂である。勿論女坂をゆくのだが、かなり

急で丈高い石段もあつたりしたので、昔もきつい女人が居たらしいと嘆きあつた。遅れがちな方には小川学芸員がつき添つてゐる。途中、弘法さまが杖で突いた清水をいただき、弘法様が御手の瓜で剪られた石仏さまを押む。苔むした大岩に刻まれているのだが、大層美男でいらした。大きな菩提樹があったのはこの先だったろうか。お釈迦様が悟りをひらかれた木とは少し違う種だそうだ。葉っぱが面白い。葉の裏に一本の葉脈が伸びて先に5ミリほどの実が鉛なりになつてゐる。宝珠山



来迎院はそこからじきだった。昔の茶湯寺である。その脇に朱が大分はげちょろけたくりから尊のお堂があった。うしろにのけぞつてゐるので危うしく覗きこんだら、堂裏で突っかい棒が力んでいた。大山最古の建物の由。その先の半ば土に埋れた石柱は「御手長」の碑である。神さまにおときを差し上げること、即ちご馳走することを言うのだそうだ。盗癖のある人を指すのは現世横行の言葉。11時20分大山寺につく。現在のお堂は89代手中明王太郎と大山宮大工が、力を併せて造営し

た。よって柱頭の獅子頭の胸に名が刻まれた。その誇りはいかばかりか。すべて檍材によつたといふのだから難儀なことであつたに違ひない。雨風にうたれさらされて白く朽ちてはいても、露堂々の社殿が胸をうつ。鉄不動を拝観した。鉄不動おつむりの蓮華台は、何人といえど教化し救済してこの上に坐らせたいご本願を示している。ここで昼食。午後は13時10分の出発。

道はじき朱の橋に至りつづら折りの山道になる。"山さむしこころの底や水の月"と句碑があり橋の名は無明橋とあつた。

いよいよ大山阿夫利神社である。詳細は他にゆずつて、一寸賑やかな商店街なら〇〇銀座、それが山なら××富士が相場なのに、この大山、雨降山、如意山、大福山また出世山とあっても、遂に相模富士などいう俗称は聞けなかつた。些細なことだが、はやりの半纏を着せなかつた心意気の健気さ、信仰の堅固さに私ごときは感動してしまう。大山は大山なのであつた。ちなみに安政4丁巳年6月晦日、南品川2丁目の大太刀講の納め太刀は

昭和36年8月2日に修繕されている。安政4丁巳年は1857年だから、130年3代が受けついでいることになる。信仰は生きているのだ。ご神泉のお水も美味だつた。上社にのぼる木戸のところで記念撮影をし、散会した。時丁度15時。

久々の山歩きで一寸つかれたが、大山の歴史を立体的につかめた気がする。歩いてみなければわからぬことがあるんですね。我々と同じ立場で話して下さつたのでとても興深く聞けた。今度は家族中で来よう。我田引水かも知れぬが、参加した方のお口から聞けたのも、企画した側には嬉しく心強い。かくして、この夏の特別展"大山の信仰と歴史"は、同名の講演会、大山見学会2つの関連行事をもつて、無事に終了したのである。(和田)

